

ハイデッガー『存在と時間』における超越論的観念論 ——「パズル・パッセージ」についての覚え書き¹——

富山 泰斗

0. 序

われわれは普通、自分が見ている通りそのままに物が存在すると思っている。もちろん錯覚などのようにわれわれの感覚が欺かれることは少なくないが、しかし日常的に言って、たとえば現在この部屋にある机について、自分が部屋に入った瞬間に存在し始めるようになったと考えたり、自分が部屋から出た後に突如として存在しなくなってしまうと考えたり、ましてや自分の目の前で突然別の事物（たとえば、椅子）に変化してしまうと考えたりすることはない。あくまで〈物は、これまでこのように存在し、そしてこれからもこのように存在し続ける〉とわれわれは自然に思っている。このような常識的理解はしばしば「素朴实在論」と呼ばれる。

しかし、どうしてそう言えるのだろうか。日常的に言っても、たとえば今使っている文房具がいつか壊れて処分されこの世界から存在しなくなってしまうことはありうるし、幼いころ住んでいた場所を訪れてみたら以前とは違った風景になっていたということも珍しくない。世界はこうした流転のただなかにある。われわれはこのような生成変化を引き受けて生きている。時の流れによって、いかなるものであれ、或る程度は別様に変化しうることを、常識的に認めている。しかし、どうして或る程度で済むのだろうか。世界は時として暴力的なまでの変転を見せるのにもかかわらず、どうしてわれわれはすべてがまったくの別様にはならないと思いなしているのか。存在しているものが、すなわち存在者が、これまでも、そしてこれからも存在し続けるということを保証してくれる根拠はあるのか。存在者は何かに依拠して存在しているのか、あるいは何にも依拠せずそれ自体で存在しているのか。こうして一つの根本的な問いが浮か

び上がる——そもそも存在者は、いったいどのように存在しているのか。

この問いは哲学史において、「実在論」対「観念論」という最も大きな論争の一つを形成したものである。ここではその複雑な哲学史的背景にとらわれずに、あえて次のようにゆるやかな規定を与えることから始めよう。すなわち、「実在論」とは〈存在者一般は、われわれの意識体験から独立して存在している〉と考える立場であり、それに対して「観念論」とは〈存在者一般は、われわれの意識体験に依存して存在している〉と考える立場である、と。

そしてこの伝統的な問題設定をいったん引き受けよう。近代哲学において決して等閑に付すことのできない影響をもたらしたあのイマヌエル・カントが、自らの哲学的立場として提示した「超越論的観念論」も、こうした論争に対する回答の試みの一つと言いうるものであり、さらにまた名称を同じくする立場を標榜していた哲学者の一人に、現代哲学において今なお大きな潮流をなす「現象学」の創始者である、あのエドムント・フッサールがいたという二つの哲学史的事実を思い起こしておこう。このように大きく眺望したうえで、次のように問うてみたい——フッサールと同じく現代哲学に圧倒的な衝撃を与え、前世紀最大の哲学者の一人と幾度となく評されてきたあのマルティン・ハイデッガーもまた、彼らと同じように超越論的観念論という立場から「実在論」対「観念論」の論争に対して回答を試みていたとすれば、どうか。

ハイデッガーの哲学に超越論的観念論を帰属させる解釈姿勢それ自体は、新奇なものではないが、いまだ標準的な見解として共有されるには至っていない。当然ここでその姿勢の十全な正当化を遂行することは困難であるが、さしあたり『存在と時間』(1927)における次の一節を手引きとして進めたい。

存在者は、そのものが、それによって開示され、発見され、規定されるような、経験や知識、把握からは独立に存在している。しかし存在は、存在了解といったものが、自らの存在に属している存在者の了解のなかにのみ〈存在する〉。(SZ, 183) ²

この、一方で実在論的に、他方で観念論的にも響く一節は「パズル・パッセージ」(Cerbone 1995, 401 ; cf. Blattner 1994) と呼ばれ、近年その「解釈」をめぐる

ってたびたび議論が巻き起こっている。

われわれはこれを端的に〈存在するものと、存在することの区別〉という「存在論的差異」の教説として理解できるかもしれない。しかし『存在と時間』において、存在とはつねに「存在者の存在」であると定められていた (vgl. SZ, 9)。それゆえに、この連続する二文はあくまでも存在者の存在についての言明であって、これを直ちに存在論的差異として理解するには、表現的にいくらかの困難を伴うようにも思われる。われわれは、このことを最大限「問題」として引き受けるところから始めたい。

われわれはひとまず、この一節を「存在者は存在了解から独立している」(独立テーゼ)と、「存在は存在了解に依存している」(依存テーゼ)という二つの主張として、分節しておこう。つまり、ここでのポイントを存在論的差異よりもむしろ「存在了解」にあると考えておく。とはいえもちろん、存在論的差異を軽視するわけではない。事実、のちに「われわれは、存在了解のようなものを初めて可能にするような区別を存在論的差異と呼ぶ」(GA26, 193 ; vgl. GA24, 22f.)と言われるようになることから、パズル・パッセージの「解釈」に際して、まずもって存在論的差異と存在了解との密接な連関を踏まえるべきである。しかしそれだけではなく、ハイデッガーが『存在と時間』において、われわれ自身がそのつどそれであるところの存在者、すなわち人間を「現存在」として定式化し、さらに「存在了解は、それ自体、現存在の存在規定なのである」(SZ, 12)と言っていたことを考慮に入れるならば、パズル・パッセージの「解釈」は、現存在の存在体制の理解とも密接に結びついていることを、ここでは強調したいのである。そしてそのとき、この「解釈」は、現存在があらかじめもつ「先存在論的な存在了解」を開発する基礎存在論ならびに実存在論的分析論の試み、つまりは『存在と時間』既刊部全体の枠組みの理解とも結びつきうる「問題」として受け取られるべきものとなる (vgl. SZ, 15)。

そこで本稿では、存在了解、ならびに存在論的差異と現存在の存在体制を、超越論的観念論の理論的側面に関連づけてあらためて理解し、それを踏まえたうえで、パズル・パッセージは前提の修正や補助線的な推測なしに、ハイデッガーの超越論的観念論と名指しうる理説の一端が表現されていたものとして解釈しうると示すことを、その最終的な目標とする。

1. 超越論的、観念論的 - カントとフッサールについて

1.1 実在論的直観の正当化

議論に先立って、まずは「超越論的 (transzendental)」という概念の語義を、ここでは『純粹理性批判』(1781/87 ; 以下『批判』とする)におけるカント自身の公式的定義に即して「認識についての認識」と考えておく (vgl. KrV, B 25). 一般に諸学ではさまざまな対象についての認識が扱われる。たとえば物理学では「なんらかの物体が、或る地点 A から別の或る地点 B まで移動したときの変位の大きさはいくらか」というように、物体という対象についての認識が扱われる。それに対してカントの哲学では、そうした認識のなかでも、その成立根拠が経験に対して非依存的と考えられる認識、すなわちア・プリオリな認識が扱われる。そうした認識を主題化する次元のことが「超越論的」と呼ばれる³。

それでは超越論的観念論とはどのような立場か。そもそもハイデッガーの議論に立ち戻るなら、『存在と時間』は「実在論」対「観念論」といった論争を無意味なものとして解体しているはずである (vgl. SZ, 202, 205f). ならば、超越論的観念論が「観念論」の枠組みに含まれる以上、本稿の解釈姿勢は、彼の企図と根本的に反しているのではないだろうか。

しかしよく言われることだが、超越論的観念論は単なる観念論ではない。事実、カントは『批判』(A版)の「第四誤謬推論」において、自らの立場が経験的観念論と誤解されることを避けていたし、フッサールも『デカルト的省察』(1931)において、それがいわゆる実在論と必ずしも対立するわけではないと留保している (vgl. KrV A 366ff. ; Hua I, 118f). この点については多くの誤解を招いたカントによる定式化ではなく、フッサールに依拠することが有用であると思われるので、まずは彼の公刊テキストにもとづいて議論を進めよう。

重複を厭わずに述べ直せば、フッサールの超越論的観念論は、たとえば〈総じて存在者が実際に存在するには意識体験が不可欠である〉という存在者の実在に直接関与するような帰結を即座に許容する立場ではない。もしそのような形而上学的帰結を承認するならば、その観念論は個別的な存在者だけでなく、世界の実在性までも不確かなものへと転化させ、われわれを懐疑論へと導くことになる。しかし周知のとおりフッサールは初期の『論理学研究』(1900/01)

から一貫して世界の実在性ならびにその存在証明にコミットすることを避け、形而上学に中立的な態度をとっていたとされる (vgl. Hua XIX/1, 26).

では、フッサールの哲学が形而上学的な観念論ではないとすれば、彼の超越論的観念論はどのような意味で観念論であるのか。さしあたりそれは、〈存在者一般の「意味」が「構成」される〉という点においてであると言いうるだろう⁴。すなわち、われわれが存在者に関わるためには、それら諸対象がわれわれにとってなんらか「意味」をもつものとして与えられている必要がある。そうした「意味」とは、われわれの日常的な行為を可能にしてくれるものである。その「意味」の与えられ方を、われわれの意識作用から明らかにしようとする点に彼の超越論的観念論の主眼があると、まずは述べておくことができる。つまり、フッサールの超越論的観念論は直ちに形而上学的観念論の肯定を帰結するものではなく、それどころかわれわれが日常的な直観としてもっている素朴實在論についてその可能性の条件を問い、解明しようとする企てとして解されるのである。

1.2 自我の自己解明

しかし、フッサールの超越論的観念論がいくら外的实在を直接否定する立場ではないとはいえ、観念論によって實在論的直観を正当化するという試みは一見不合理にすら思える。この試みの理解のために、次の一節から始めよう。

この観念論 [=超越論的観念論] は、[...] あらゆる可能な認識主体としての私の自我の自己解明にほかならない。[...] このことはしかし同時に、構成する志向性そのものを体系的に露呈することを意味している。(Hua I, 118f.)

ここでは超越論的観念論が「あらゆる可能な認識主体としての私の自我の自己解明」として遂行されることが表明されている。この解明が「構成する志向性そのものを体系的に露呈すること」とも言われていることに注目しよう。志向性とは〈意識はつねに何ものかについての意識である〉という周知の定式化が示しているように、対象へと向かう意識作用の性質のことである (vgl. Hua III/1,

73, 188). この志向性による「構成」とはそもそも何だろうか. よく指摘されるように, それは意識主体がなんらかの対象を産出するといったような意味での観念論的内容を示すものではない. フッサールが構成という語を事物の知覚経験について論じる文脈において主に使用していることから, ここでは事物知覚の場面に限定して考えることにする⁵.

フッサールは『イデー I』(1913)において, 構成の問題は「或る現出物の統一に必然的に相属している規制された現出系列が […] その形相的固有性において, 分析されえかつ記述されうる」(Hua III/1, 351) ことによって解明されると断言していた. たとえばわれわれは一個の梨を多様なしかたで経験するが, それにもかかわらず梨は一個の梨として「直観的に鳥瞰されて理論的に把握されうる」(ebd.). その経験は, それが梨についてのものであるようなしかたに従って進行する. 想像のような意識作用においても, われわれは「形相的固有性において」それを一定のしかたで経験するのである. この経験に際して働く規則的な志向的相関構造の分析こそが構成の問題であるとフッサールは考えている. それは, 対象と意識の相関構造が自己展開する過程として理解されるべきである.

そして『デカルト的省察』において「あらゆる対象一般 (内在的なものも含む) が示しているのは, 超越論的自我の規則的構造」(Hua I, 90) であり, それが「その〔対象の〕本質があらかじめ描かれている類型に従って可能な, その他の意識を支配する普遍的規則」(ebd.) であるとも言われていたことを勘案するなら, 先の引用において「あらゆる可能な認識主体としての私の自我の自己解明」と言い表されていたことも理解できるだろう. フッサールの超越論的観念論とは, 存在者一般の「意味」, すなわち〈その存在者はどのようなものであるか〉というわれわれの理解が成立する可能性の条件を, われわれの意識における規範的な相関構造から解明しようとする企てとして理解されうる.

1.3 可能な意識作用との相関性

フッサールの観念論が素朴実在論と両立しうるものであることを示すには, 「可能な知覚」のアイデアに目を向けることが重要であるように思われる (vgl. Hua III/1, 96). その要点を抜き出すならば, それは知覚における「顕在性/潜

在性」の区別にあるとここでは理解しうる。われわれはなにかを知覚しているとき、決してそのみを知覚しているわけではなく、背景的に知覚されているものを伴うはずである。そしてさらにこの知覚から進めるならば、意識野において顕在化していない事物も同時に実在するものとして、われわれは理解しているはずである。そうした理解は可能な知覚系列によって成立する。このように知覚可能性に訴えることで、われわれの実在論的直観をフッサールは観念論的に正当化するのである。

知覚可能性によって正当化するこのようなアイデアは、カントにおいても認められる⁶。『批判』における「経験進行の法則に従って知覚と合致するものはすべて現実的である」(KrV, A 493 / B 521) という文言は、上述のことがらとおおよそその一致を見せるものである。そしてわれわれは、次のようにも言われていたことを総括的に確認しておこう。

[われわれの現実における] 知覚に先立って、或る現象を現実的なものと呼ぶことは、われわれが経験の進行においてそのような[現象の] 知覚に出会わざるを得ない、ということの意味するか、そうでなければまったく意味のないことである。(KrV A 493 / B 521 ; vgl. A 495f. / B 523f.)

このようにカントによる超越論的観念論の内実への言及を見たとき、われわれはフッサールの観念論と併せて、総じて超越論的観念論を〈存在者一般は、われわれの可能な意識作用と相関するかぎりにおいて存在する〉と考えるものとして定式化することができるだろう。

1.4 現象／物自体

1.1 節においてフッサールが自身の立場について実在論と対立するものではないと留保していたことを見たが、さらに「少なくとも限界概念として物自体の世界の可能性を残しておくことができる、と信じるカント的な観念論でもない」(Hua I, 118) とも留保していたことに注意しよう。カント自身は『批判』において「空間あるいは時間において直観されるすべてのもの、したがってわれわれにとって可能な経験の対象はすべて、現象に他ならない。[...] このよう

な学説を私は超越論的観念論と称する」(KrV, A 490f. / B 518f.)と宣言していた。そしてまた、別の箇所ですべての現象をもって、これをすべて単なる表象とみなし、物自体とはみなさない」(KrV, A 369)と言われていたことから、カント的な観念論を〈存在者一般は、物自体としてではなく現象、すなわちわれわれのもつ表象として存在する〉と要しておくことは許されるだろう。

この「現象／物自体」という概念枠の内実については、われわれはヘンリー・E・アリソンによる「方法論的二観点説」にもとづいて解釈しておく(Allison 2004)。アリソンの示すこの解釈は、現象と物自体とを一つの同じものについての、われわれの思考における二つの異なる方法の区別とみなすものである。

このような方法論的解釈を採用した場合、物自体はなんら積極的な内容をもたず、われわれの認識能力を制限する「限界概念(Grenzbegriff)」として受け取られることになる(vgl. KrV, A 255 / B 311f.)。フッサールが上記の引用において拒絶していたのは、こうした限界概念であるような物自体である⁷。

2. 『存在と時間』における超越論的観念論

超越論的観念論をこのように素描してみせたとき、ハイデッガーの哲学はいかなる意味で超越論的観念論的であると言いうるのだろうか。しばらく迂回することにしよう。まずは前提的に『存在と時間』の基本的なプログラムをあらためて整理しておきたい。そのことによって、『存在と時間』の「自我論的な」側面を強調し、超越論的観念論を帰属させるための見晴らしを良くしておきたいのである。

2.1 存在一般の意味への問い

『存在と時間』は「存在一般の意味への問い」(SZ, 1)を開発していく試みである。これはどのような試みだろうか。まず、ここで言われている「意味」は、日常的な語法とはいったん区別されうることに注意しよう。彼によれば、それは、「存在の了解の第一義的企投が、それを見越して行われるところ」(SZ, 324)である。「企投(Entwurf)」は、カントの『批判』(B版)における序文の次の箇所にその初出が求められる⁸。すなわち、「理性の洞察するものは、理性自身

のみずからの企投にしたがって生み出すものにほかならない」(KrV, B XIII). これを〈人間は、自らの見出した規則的・法則的図式にしたがってのみ、その対象を理解する〉という主張として解釈することは困難ではないだろう。そして『存在と時間』においても、われわれによる「了解 (Verstehen)」はこのような企投の構造をそなえていると示されていた (vgl. SZ, 145). したがって「存在一般の意味への問い」は、〈われわれが存在を理解するに先立って、それがどのような規則・法則のもとで与えられるものであるかを描きだすものは何か〉と問うものになる。

また『存在と時間』の理論的中枢をなす「存在者の存在」という名高い発想も、可能性の条件というカント哲学における中心概念ときわめて類比的な構造をもっている⁹。すなわち、われわれが、存在者を存在者として了解できるのは、あらかじめ、われわれ自身が、存在者の可能性の条件としての存在者の存在を或るしかたで了解しているからである。先述の点を鑑みるならば、このとき存在者についての了解に伴う企投は、存在者の存在を見越して行われている (vgl. SZ, 325)。

すでに知られていることであるが、『存在と時間』既刊部は、現存在があらかじめもっているこうした存在了解の成立を、現存在の存在体制から分析する実存論的分析論として遂行されている。『存在と時間』に超越論的観念論を帰属させるには、このことを掘り下げることが必要であろう。

2.2 現存在、あるいは世界 - 内 - 存在について

序節でも述べたように、ハイデッガーは存在了解をそなえている存在者（たとえば人間）のことを、伝統的見解の安易な流入を防ぐべく「現存在」と術語的に定式化していた。そして他方でそれが「世界 - 内 - 存在」という統一的な存在体制をもつと規定されていたこともよく知られている事実である。重要なのは、こうした概念規定がどのように伝統的な意識主観に対する反抗的措置として機能しているのかという点である。

現存在の「現 (Da)」という概念は直接性と媒体性とをもつ両義的なものである。ドイツ語で「そこ」という指示詞的な語義をもつこの副詞は、ハイデッガーが明言しているように根源的な空間了解を表している (vgl. SZ, 132). つま

り、彼は「そこ」の直接性（ひいては自己の定置可能性）を強く見てとっているのである。これに対して、むしろ「ここ（Hier）」のほうが「そこ」よりも直接的であるという異論があるかもしれない。しかしハイデッガーがこの直後で、現存在の存在論的構造について「みずからその明るみを存在している」（SZ, 133）と比喩的に述べていたことを解釈するならば、われわれの経験のうち、すべてに先立っている最も根源的な経験は、われわれの眼前にいま広がっている光景であるということ、つまりは、われわれは第一に、いわば自らの周囲に位置する「そこ」を了解しているのであり、その次に自己を客体的に意識することで「ここ」という空間性を了解しているということになる。さらに、われわれはこの直接的な「そこ」において、さまざまな存在者を存在者として発見している。「現存在はおのれの開示性（Ershlossenheit）である」（ebd.）とは、われわれが「現」を媒介として被発見的なしかたで存在者の存在を了解していること、そしてまさに「現存在」という規定が示しているのは「おのれ」のそのような被発見的様態であることを強く主張する言明にほかならない。「現」はこのような意味で直接性と媒体性という二つの側面をもっているのである¹⁰。

このように現存在の「現」を、存在者の存在が成立する場として認め、さらに世界 - 内 - 存在の分析を考えあわせれば、自己が一種の「起点」としても働いていることが理解できる。ハイデッガーは世界をフッサールが言うように存在者の総体であるとは考えず、また意識主体の心的な意味連関に基づいた意味付与の産物とも考えない。彼は「道具的存在者（Zuhandenes）」に定位して世界を理解する。たとえば電車に乗るといったような、われわれの日常的な行為を考えてみよう。このとき電車という道具の経験には、それが現代社会において遠く離れた別の土地へと移動するための交通手段としてある、という理解が前提とされる。つまり、その用途・目的や背景的な文化といった指示連関全体が、道具を成立させる可能性の条件となっている（vgl. SZ, 69）。それだけではない。道具の経験はこうした全体論的な理解のみならず、実践的な理解をも要求する。たとえば電車を使用するとき、われわれは〈われわれが使用しているところのそれが、いかなる文化状況において、いかなる目的 - 手段連関のなかで、その役割的位置を占めているか〉という位置価をそのつど意識はしない¹¹。このような全体論的・実践的理解を要求するものとして、ハイデッガーは世界を規定

している。

しかしこのように説明するだけでは世界が意識作用による構築物であるという理解を防止することは難しい。ハイデッガー自身も世界を道具的存在者の織りなす連関として把握したときに、それが観念的なものとして解消されてしまうということを危惧している (vgl. SZ, 87f.)。ここで注意を払うべきは、上述した道具的存在者の位置が「適所性 (Bewandtnis)」と呼ばれ、道具的存在者は「それがともかくも現にある通りのありさまで」、現存在の側から「適所を得させる (bewenden-lassen)」と言われていたことである (vgl. SZ, 84f.)。さらに言えば、すでに何度か鋭く指摘されてきたように道具の使用者である現存在の側の統制を離れたものとして、道具は実在性を帯びるのである¹²。世界は決して現存在によって恣意的に構成されるものではなく、われわれの世界 - 内 - 存在たる現存在の機構に属すものである。

そしてまたこの適所性に注意したとき、われわれは道具使用の経験は、同時に行為するわれわれ自身についての経験でもあることに気づけるだろう。たとえば包丁は食材を切ることへの適所性があるが、この切ることへの適所性は食材を食べやすいサイズにすること、そしてそうすることの適所性は現存在の存在可能性を「主旨 (worum-willen)」とする。別言すれば、適所性の連関は現存在の行為を中心として体制化されているのである。このとき、或る行為には別の行為への指示を含む行為連関全体への理解が必要とされる。でなければ、われわれは自らの行為が何であるかを理解できず、ただ非意味的に連続する身体動作としてしか捉えられないことになってしまう。行為には、漠然とであれく自分が何のために、いまどうしているか) の理解が伴っているはずである。ハイデッガーが、われわれ現存在がつねにすでになんらかのしかたでコミットしてしまっている自己自身の存在規定のことを「実存」としているのも、少なからずこのような実践的モデルを念頭に置いていられる。ここまで述べたことを総括するならば、たとえば料理人として包丁で梨を切り分けるという行為には、包丁という道具の実践的・全体論的理解が前提とされているのはもちろん、自分が料理人であるという存在規定を自らの実存として実践的に引き受けている (その存在可能性に企投している) ことも含まれている。

そして了解することはしばしば実存することと等置される (vgl. SZ, 144, 231,

337). それゆえに、自らの実存を起点として、世界 - 内 - 存在という統一的構造から、道具と織りなすコンテクストと自らの可能な行為のコンテクストを辿ることで、自らの存在可能性の総体を把握しようとするモデルは、上で見た超越論的観念論の理論的側面に強く近似しているのもであるとわれわれは解釈しうる。だが 1.4 節で見たように、カントの超越論的観念論においては現象と物自体という超越論的区別の導入がその中核をなしていると考えられていたことを想起しよう。限界概念としての物自体とは、さしあたりわれわれが把握しうる可能性の総体の外部として考えることができる。フッサールはこのような外部を認めていなかったことも従前において確認された点であったが、この『存在と時間』の理論的枠組みには、この可能的経験の「外部」を要請する発想が見られると思われる。この点についてはまた他日に論じるほかないが、それが「死」や「良心」など第二篇において展開される議論に受け継がれているという暫定的見通しだけは述べておく。

3. パズル・パッセージについての覚え書き

パズル・パッセージを引用し、「問題」である点を再確認しておこう。

存在者は、そのものが、それによって開示され、発見され、規定されるような、経験や知識、把握からは独立に存在している。しかし存在は、存在了解といったものが、自らの存在に属している存在者の了解のなかにのみ〈存在する〉。(SZ, 183)

序節でも述べたように、このパッセージは一見したところ存在論的差異の表明として理解できるように思われるが、字義通りに強く受け取るならば〈存在者の存在は現存在からは独立しているが、存在者の存在は現存在に依存してもいる〉という矛盾めいた主張として映る余地をもっている。しかし、たとえ存在論的差異が『存在と時間』では明確に定義されておらず、その直後の 1927 年夏学期講義『現象学の根本問題』において初めて提示されたというテキスト上の事実をいくらか強く引き受けるとしても、その内実からして、ここで存在論的

差異が少なからず潜在しているということも決して無視はできないだろう。しかしそうであるとすれば、われわれは単に存在論的差異と考え合わせて、これを〈存在者は実在的であり、存在は観念的である〉というテーゼの表明としてまとめてしまってもいいように思われる。

実際のところ、ヘルマン・フィリップセは「存在者实在論 (entity realism)」と「存在観念論 (being idealism)」の共存からパッセージの「解釈」を始めようとしている (cf. Philipse 2007, p.180)。この試みは後述するようにいくつかの問題を含むが、われわれは序節で焦点を明確化するために仮設的に定式化しておいた「独立テーゼ」と「依存テーゼ」とをこの共存へと重ね合わせて議論を進めてみよう。以下において試みられるのは、パズル・パッセージについて現状筆者がもっている仮説的展望を示す、ささやかな覚え書きにほかならない。

「存在者实在論」については、ハイデッガーが道具的存在者だけでなく、「事物的存在者 (Vorhandenes)」に存在論的な実在性を認めていたことから、内世界的存在者一般に関する实在論として理解してよいように思われる (vgl. SZ, 211)。しかし、この存在論的な実在性の内実に関してハイデッガーが明言しておらず、また『存在と時間』において「自然」が、道具や事物とは別のしかたで内世界的であるという不明瞭な存在論的身分に留まっていたことには注意が必要であろう¹³。この問題に本稿で深く立ち入ることはできないが、さしあたりこの自然の特異な存在様式を踏まえたうえで、存在論的な実在性が内世界的な存在者の存在様式としてなんらか優位を占めているわけではなく、「気遣い (Sorge)」の現象へと還元されるべきであると主張されていたことを確認しておこう。それゆえに、次のようにも言われていたのであった。

それにしても、現存在が——すなわち、存在了解の存在的可能性が——存在しているかぎりでのみ、存在が《与えられている》のである。現存在が実存していないならば、[...] そのときには、存在者が存在するとも、存在者が存在しないとも言うことができない。もっとも、いまは、存在了解が存在し、したがって事物的存在性の了解も存在するかぎり、存在者はそのときにもなお存続するであろうとすることができるのである。(SZ, 212)

序節においても注記したことでもあるが、パズル・パッセージは『存在と時間』第一篇第六章の序論的位置づけを占めている行文中で登場していた。第四十三節(c)におけるこの論述は、その展開として読むことができる。そしてこの直後に「ここに標示した依存性は、存在者ではなく存在が存在了解に依存していること、すなわち実在的なものではなく実在性が気遣いに依存していること」(ebd.)と言われていることから、気遣いを根源的だとみなすハイデッガーの論理がここを貫いていると理解すべきであろう。

フィリップセは、存在観念論の可能なオプションとして次の三つを挙げる。すなわち、存在を(A)意識内在的な存在者として理解するもの、(B)存在者を構成する超越論的枠組みとして理解するもの、(C)いかなる存在者として遭遇するかという超越論的枠組みとして理解するもの、である。このうち、(A)がハイデッガーの議論に即していないことは明らかである。というのは、「観念論は、存在と実在性は『意識のなかに』のみあると強調するが、このことのなかに、存在は存在者によっては説明されえないということについての理解が表現されている」(SZ, 207)のであるから、別言すれば、ハイデッガーの観念論は、存在論的差異を表現するものでなくてはならないからである。

では(B)はどうか。結論から言えば、これはハイデッガーの議論にはあまり即していないものである。ハイデッガーにとって「了解」とは、「情態性(Befindlichkeit)」や「語り(Rede)」と並んで現の開示性の一つであった。現の開示性とは、意識主観による存在者への一種の直接的なアクセスではなく、現を媒介とした接近様式である。これは、従来の主観-客観図式を解体して世界-内-存在という統一的構造が導入された眼目からも明らかである。「このような存在者へのあらゆる接近通路は、存在論的には、現存在の根本構成たる世界-内-存在にもとづけられている」(SZ, 202)。

われわれに残された方途は(C)のみとなった。そして実際にフィリップセは(C)を選択している(cf. Philipse 2007, p.183)。だが、このような超越論的枠組みの内実は依然として不明瞭なままである。そもそも、いかなる存在者として遭遇するかを定める枠組みには、Als構造があったようにも思われる。すなわち、「およそ了解において開示されたもの、すなわち了解されたものごとは、いつでもそれについてのその《……として》(als)が浮かびあがりうるよう

なありさまで与えられている」(SZ, 149)。こうした Als 構造は、われわれの述定的な言明のみに付随するものではなく、現存在によるあらゆる認識に対して先述定的に伴っているものとして、すなわちわれわれの有限的認識の指標として機能している。しかしこれをはたして存在と同一視できるだろうか。

われわれは (C) を留保し、先の引用で「存在が《与えられている》」と言われていたことに目を向けよう。われわれはここに、フッサールの「カテゴリー的直観」との類縁性を指摘できる。カテゴリー的直観とは、対象を感性的に知覚する感性的直観とは異なり、現実存在する具体的な対応物なしに端的に与えられるカテゴリーを志向する働きのことである。ハイデッガーは 1925 年夏学期講義『時間概念への歴史序説』において、このカテゴリー的直観の発見の決定的な意義は「イデア的存立がそれ自身においてそれ自身を示すような作用があり、このイデア的存立は、この作用の作り物、思惟や主観の機能ではない」(GA20, 97) という点にあると断定している。つまり彼は、カテゴリーは意識主体による構築物や素朴に観念的な実体ではないと考えている。では「それ自身においてそれ自身を示すような作用」とは何だろうか。これについては、『存在と時間』序論でなされるあの有名な現象の定義を想起することが肝要である。すなわち、現象とは「ありのままにおのれを示すもの」(SZ, 28) である、と。そしてこのさしあたりたいていは隠蔽されている現象を、現象学は「おのれが示すものを、それがそれ自身のほうから現れてくるとおりに、それ自身のほうから見えるようにすること」(SZ, 34) と定義されていたとおりに、明るみに出すのである。この退去してしまっている現象学的な現象こそ、存在者の存在としてハイデッガーが念頭に置いていたものであった。われわれはこれを踏まえ、存在了解の可能性の条件としての現存在（ひいては気遣い）の超越論的観念論的側面を描きうるであろうことを、展望として記しておきたい。

4. 結に代えて

ここまでの道のりを振り返ろう。われわれは最初に超越論的観念論に関する理論的側面の整理を行った。哲学史上明示的にこの立場を名乗っていたのはカントとフッサールの二人であった。この二人の立場が果たしてどの程度まで同

一視できるのかはそれ自体大きな問題であるため、ここでは後に示すハイデッガーのそれとの異同を際立たせるという目的のもと、超越論的観念論が素朴実在論、すなわちわれわれによる存在者との日常的な関わりについて、その可能性の条件の解明を目的としていること、そのために意識作用（自我）を起点とし、規範的な相関構造および可能な系列に注目し自我の分析を遂行すること、そしてそれゆえに、〈存在者一般は、われわれの可能な意識作用と相関するかぎりにおいて存在する〉と考える点ではカントとフッサールは共通していると考えられること、しかしカントはわれわれの認識能力を制限する物自体を許容するのに対して、フッサールはそれを断固として拒否することが確認されたのであった。

さらにまた、『存在と時間』に超越論的観念論的側面を読み込むべく、その存在一般の意味への問いがわれわれの存在了解の分析に定位する点、別言すれば実存論的分析論が現存在の存在体制に立脚して遂行されるという点に着目し、それが哲学史的伝統に強く反抗しつつも、自己を起点として可能な経験の全体を把握する超越論的観念論の系譜に位置づけられうることを明らかとしたのであった。そしてこのとき可能的経験の「外部」の役割をハイデッガーは「死」や「良心」の議論に担わせていたと思われるが、これらについては紙幅の都合上、展望として述べるに留めた。

そして序節において『存在と時間』に超越論的観念論を帰属させる手引きとして参照したバズル・パッセージの議論に立ち戻り、いくつかの「解釈」を試論的に検討したのであった。遺憾ながらこの試みは成功したとは言いがたい。しかしこの試みによって、存在者は現存在の理論的把握からは独立に存在し、他方で存在は存在了解をもつ現存在の了解のなかにのみ〈存在する〉、というのはパラドキシカルかもしれないが、『存在と時間』の枠組みを超越論的観念論として踏まえ、存在論的差異ならびに存在了解の哲学的含意を十分に考えあわせれば、おそらく外見ほどこの事態はパラドキシカルではないであろうことが示唆されたのではないだろうか。しかし、このわずかながらの示唆的帰結は、はたしてどれほど正当化され、またどれほどの意義をもちうるのだろうか。われわれはこのように課題の方向性を示すにここでは留めておこう。

できるだけの可能性を願いつつ、ひとまず終わりを迎えることにする。

註

1. 本稿は、2016年7月17日に行われた哲学若手研究者フォーラムにおける個人研究発表を元に全面的な改稿の結果として成立したが、その機縁として丸山文隆氏の一連の諸研究（とりわけ、丸山 [2014]、同 [2015]）ならびに、発表時に皆様から頂いたコメントに多くを負っている。記して感謝申し上げる。本稿の内容は2016年度に立命館大学へ提出する卒業論文において具体化される予定であり、ここでは厳しい紙幅の都合上、現状の構想に大幅な圧縮を施したことをあらかじめおことわりしておきたい。
2. パッセージに関して、文脈を注記しておきたい。この一節は、『存在と時間』第一篇第六章「現存在の存在としての気遣い」において序論的役割を担う第三十九節「現存在の構造全体の根源的全体性への問い」の末尾にて登場する。周知のとおり、『存在と時間』では第二章から第五章まで現存在の根本体制（すなわち、世界 - 内 - 存在）に関する分析が行われるが、そこに存する統一的な観点として「気遣い」が剔抉されるのが第六章である。第六章は、この気遣い、すなわち現存在の存在と、世界性、道具性、事物性（実在性）の存在論的連関を示し、とりわけ（伝統的な）実在性ならびに真理という二つの概念の明確化を目的とする。パズル・パッセージは、存在と真理とがしばしば同じ問題圏のもので考えられてきた背景に「存在と了解との必然的な連関」（SZ, 183）があることの解明を予告するために言われていた。なお、原文は以下のようになっている。Seiendes ist unabhängig von Erfahrung, Kenntnis und Erfassen, wodurch es erschlossen, entdeckt und bestimmt wird. Sein aber »ist« nur im Verstehen des Seienden, zu dessen Sein so etwas wie Seinsverständnis gehört.
3. われわれは、当面カントとフッサールの微妙な距離感の上で論じるのであるから、その判定には慎重にならなければならない。すなわち、たとえば「超越論的」を始めとする概念について、必ずしも二人のあいだで同一の概念として共有されているとは限らないことに注意しよう。しかしながら、こうした諸点についての検討は本稿の範囲を逸脱するものと判断し、ここでは「超越論的観念論」の内実の相違を除いて大まかには同じであったと解釈しておくに留めておきたい。ちなみに、「超越論的」についてカントとフッサールの相違については、邦語文献では谷 [1998] 第一部第五章、とりわけ 145 - 150 頁が参考になる。
4. このようなフッサールの超越論的観念論の定式化に関しては、植村 [2011] に示唆を得た。また、彼の観念論と伝統的な実在論、観念論との関係を考えるにあたり、八重樫 [2013] 第二章の議論はきわめて優れており、本稿の理解もこれに大きく負っている。
5. フッサール自身はこうした構成の分析を、事物の知覚という場面だけではなく、原理的にはあらゆる対象について可能であると考えていたように思われる（vgl. Hua I, 90; 松井 [2015a], 25 - 6 頁）。なお、松井の論文はフッサールの還元と構成の概念付置からフッサールの超越論的観念論の基本的構図を描くものであり、本節の執筆に際しても大いに参照した。
6. このような観点からカントの超越論的観念論の哲学的含意を述べた研究として、湯浅 [2003] 第一章を挙げることができる。
7. この点については多くの検討を要するが、これ以上は本稿の範囲を逸脱するものと判断し、立ち入りを断念せざるをえない。ひとまずはフッサールが超越的な視点の相関者としての物自体を拒絶していると考えられることを確認しておこう。松井 [2015b] を参照せよ。

8. これについては細川 [1992] が説得的である。細川は『存在と時間』における「自然の数学的企投」という語が『批判』における「企投」と対応していることを明らかにし、ハイデッガーがカントに注目する以前にはこの「企投」概念が導入されていなかったことを根拠に、この注目によって存在一般の意味への問いが可能になったとしている。136 - 138 頁を参照せよ。
9. 門脇 [2002] , 138 - 139 頁を参照せよ。われわれが経験の対象に出会うためには、その対象の現出を先行的に可能とする自然因果的でない条件が要請されるが、カントはこれを「ア・プリオリな形式」に求め、直観（感性）においては、それは時間と空間であると述べている。そしてハイデッガー自身も、『存在と時間』の第七節 A で、「存在者の存在」はカント的な「直観の諸形式」（とりわけ、ここでは「時間」が特に念頭に置かれていると考えられる）に当たると述べている (vgl. SZ, 31) 。なお、門脇の同書はハイデッガーの世界性の議論をきわめて鮮やかに読解しており、本稿の成立に不可欠であった。
10. このように現存在に直接性と媒体性を見出す議論として村井 [2005] , 同 [2014] を挙げることができる。
11. ここで、ハイデッガーが「連関」ということで必ずしも目的 - 手段連関のみを考えていたわけではないことに注意したい。それは存在者を理解可能にしてくれるための全体的脈絡（「有意義性 (Bedeutsamkeit)」）を現出させるものである。池田 [2011] , 84 頁以降を参照せよ。
12. 池田上掲書, 39 - 41 頁, ならびに荒畑 [2009] , 38 - 39 頁などを参照せよ。とくに池田はこうした道具的存在者への言及から〈道具は、われわれの主題的な把握の外にあればあるほど、実在するようになる〉という新しい実在論のテーゼを読み取っている (同書, 39 頁参照) 。
13. なお『現象学の根本諸問題』では、自然は世界性のいわば外部に位置するものとして明確に設定されていた (vgl. GA24, 240) 。この問題を扱ったものに、丸山 [2012] がある。

凡例

- ・本稿における引用は一部拙訳を含むが、多くは邦訳を参考にし、適宜表現を変えて使用した。文献表では、原典と筆者の参照した邦訳の双方を記した。
- ・引用文における強調は原則的に原著者によるものである。また、引用文における〔亀甲括弧〕はすべて引用者による補足である。
- ・〈山括弧〉は、原則的に意味の区切りを強調する目的で用い、必ずしもなんらかの術語ないし引用であることを含意しない。

参考文献

一次文献

- GA: Heidegger, Martin., *Gesamtausgabe*, Klostermann, 1976ff. [辻村公一ほか編 (1985 -) 『ハイデッガー全集』, 創文社]
- GA24 : *Die Grundprobleme der Phänomenologie*.
- GA26 : *Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz*.
- Hua : Husserl, Edmund., *Husserliana Gesammelte Werke*, Nijhoff, 1950ff.
- Hua I : *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*. [船橋弘訳 (1980) 『デカルト的省察』, 中央公論社]
- Hua III/1 : *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch, Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*. [渡辺二郎訳 (1979 - 84) 『イデーニ I - 1 / 2』, みすず書房]
- Hua XIX/1 : *Logische Untersuchungen, Zweiter Band, Erster Teil, Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*. [立松弘孝・松井良和・赤松宏訳 (1974) 『論理学研究 2』, みすず書房]
- KrV: Kant, Immanuel., *Kritik der reinen Vernunft*, Meiner, 1976. [高峯一愚訳 (1965) 『純粹理性批判』, 河出書房]
- SZ : Heidegger, Martin., *Sein und Zeit*, Niemeyer, 2006. [細谷貞雄訳 (1964) 『存在と時間』, 筑摩書房]

二次文献

- Allison, Henry E., 2004, *Kant's Transcendental Idealism*, revised and enlarged edn, Yale University Press.
- Blattner, William D., 1994, "Is Heidegger a Kantian Idealist?", in *Inquiry* 37, pp.185-202.
- Cerbone, David R., 1995, "World, World-Entry, and the Realism in early Heidegger," in *Inquiry* 38, pp.401-421.
- Philipse, Herman., 2007, "Heidegger's "Scandal of Philosophy" : The Problem of the *Ding an sich* in *Being and Time*," in *Transcendental Heidegger*, ed. S. Crowell and J. Malpas, Stanford University Press, pp.169-198.

- 荒畑靖宏[2009]『世界内存在の解釈学:ハイデガー「心の哲学」と「言語哲学」』, 春風社.
- 池田喬 [2011]『ハイデガー 存在と行為:『存在と時間』の解釈と展開』, 創文社.
- 植村玄輝 [2011]「フッサールの超越論的観念論再考」, 日本現象学会編『現象学年報』第27号所収, 41 - 47頁.
- 門脇俊介 [2002]『理由の空間の現象学:表象的志向性批判』, 創文社.
- 谷徹 [1998]『意識の自然:現象学の可能性を拓く』, 勁草書房.
- 細川亮一 [1992]『意味・真理・場所:ハイデガーの思惟の道』, 創文社.
- 松井隆明 [2015a]「現象学的還元と構成の問題:フッサールの超越論的観念論の基本的構図」『フッサール研究』第12号所収, 16 - 32頁.
- [2015b]「フッサールとアリソン流カント:超越論的観念論と物自体の問題」, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室『論集』33号所収, 144 - 157頁.
- 丸山文隆 [2012]「ハイデッガーの存在一般の意味への問いと「存在論的な学」:1927年夏学期講義の方法と困難」, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室『論集』30号所収, 160 - 173頁.
- [2014]「無についてわれわれが語るときにわれわれが語ること:ハイデッガーのメタ存在論構想と『カント』書」, 電子ジャーナル『Heidegger - Forum』vol.8 所収, 95 - 110頁.
- [2015]「ハイデッガーの超越論的観念論:「ブリタニカ」草稿を手がかりに」, 『フッサール研究』第12号所収, 33 - 55頁.
- 村井則夫 [2005]「直観・了解・思惟:ハイデガーにおける直接性と媒介性」, 渡邊二郎監修『現代の哲学:西洋哲学史二千六百年の視野より』昭和堂, 401 - 434頁.
- [2014]『解体と遡行:ハイデガーと形而上学の歴史』, 知泉書館.
- 八重樫徹[2013]「善さはいかにして構成されるのか:フッサール倫理学の研究」, 課程博士論文, 東京大学人文社会研究科[<http://hdl.handle.net/2261/57339> からDL可 (最終閲覧2016年11月30日)].

湯浅正彦 [2003] 『存在と自我：カント超越論的哲学からのメッセージ』, 勁草書房.